

県指定重要文化財 全円アーチの石造り

すがわら めがね 菅原神社眼鏡橋



岡山県笠岡市

岡山県笠岡市は、慶長5年(1600)に徳川氏の直轄領となり、元和5年(1619)に備後福山の水野氏の所領に、そして元禄11年(1698)に再び幕府の直轄領となります。その後明治維新を迎え、笠岡は倉敷県に統合、明治4年に深津県、同5年に小田県と改称し県庁も笠岡に置かれていましたが、同8年には岡山県となり、県庁も消滅します。このように執政が変わりながらも、近世以降、取り組み続けたのが干拓です。

近世、財政の立て直しには新田開発が第一で、湾に面した笠岡も同様でした。寛文元年(1661)吉浜新田が完成すると、福山藩主水野勝慶は吉浜村の氏神として、菅原神社を創建したと伝えられています。

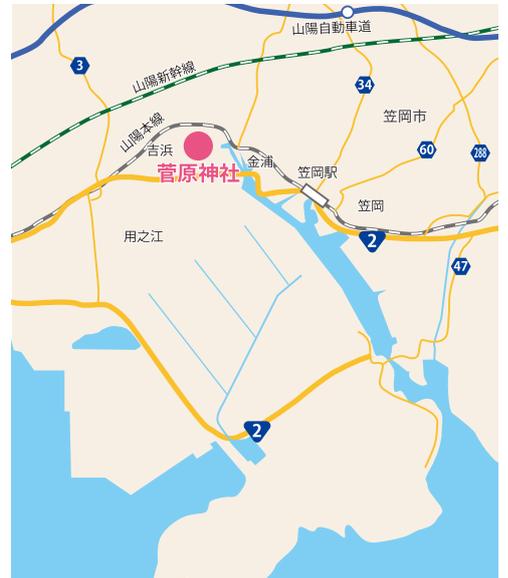
菅原神社は切妻作りで、屋根の前面が前流れにのびて向拝となる「流造」の形式で、母屋は丸柱、向拝は几帳面取の柱を使っています。社伝によると本殿は延宝2年(1674)の建立で、「大工は福山藩のお抱え大工・榊原太治兵 外二名」と伝えていますが、建築の様式から見ると、

その後建て替えられた可能性もあるようです。御神体は菅原道真の小像で、台座裏面には延宝3年とあります。

特筆すべきは参道の御手洗池に架かる眼鏡橋です。岡山県指定重要文化財のこの橋は、明治20年(1887)吉浜村狐崎の石工・佐藤豊吉(豊造)が棟梁を務めた花崗岩製アーチの眼鏡橋です。橋長11.2m、全幅3.4m、高さ約3mという橋は、大きくはありませんが、通常、アーチ石橋の多くが半円か扁平アーチにされていますが、水面下でも二連の弧を描いて全円となっているこの橋は全国でも珍しい形といえます。

眼鏡橋の架かる御手洗池は、5月になると約2千株のカキツバタが咲き誇り、あざやかな青紫の花と石造の眼鏡橋とのコントラストに目を奪われます。同時に、全体は堅牢な構造でありながら優美さを備えた橋に、携わった石工の高い技術水準と、橋に気概をかけた当時の氏子たちの深い信仰心に頭がさがります。

■位置図



「備前積み」の技術を用い、迫石と壁石が一体化した見事な石組みである。



亀石



笠岡市指定建造物「菅原神社」



菅原神社眼鏡橋
毎年5月下旬になるとカキツバタが咲き誇り、秋の紅葉とともに境内に彩りを添えている。